云ふに、決して然らず、去れば人間には之を痛み悲む同情と云ふ一種特別の感情があるからして、之れを救護し愛憐せなくてはならぬのが、社會の情態である、それは何處から來たかと云ふに、我々が理想から來たので、即ち我々道德の作用、宗教上より涵養せられて、茲に及んだものである、我々はこの社界に棲息して、朝から晩まで戰爭しつゝありしが、其心の中に正氣を顯したる人を、佛とも云ひ、聖人とも完全の人とも云ふ、詰り我々は斯く戰爭狀態の中に居るが其目途とする所は自己即ち我心を擒りて、眞正なる命令に服從せしめんと欲するに外ならぬのである、其韜略は如何なるものであるか、是れが標題に申せし「無我即大我」でなくては叶はぬことである。

三、無我卽大我

總して社會はおしなべて、動機論と結果論とが、互に劍背を削りて競爭しつゝあるので、彼の刺客伊庭想太郎が星亨に於る如何でありしぞ、想太郎が所爲たる白晝に人を殺して憚からず、暴戾惡逆に相違なきも、彼れも又た一つの理想がありて星亨その人か紳士たるにも拘らず、賄賂を貪り毒を社界に流すべきものと信し、社會の爲めに一身を犧牲にし、天に代りて誅したりと彼は公言して居るが即ち結果論に掣肘せられ、それの誤解上より爰に及んだのは、又た憫むべきの情實があるのである、人間の道德心即ち佛の敎は無我である、無我と云へば寂然として活氣のなきやうで、その爲め印度は亡國となつた抔と誹譏する論者もなきにあらざるも、それ等は誤解の甚しきもので、我々が所謂無我とはそんなものでなくして、大なる活潑々地のものである、佛の敎は實相の我を擒りて、假相の我を忘れしむるにあるので、試に諸君能く思量して御

覽、我々人間は手足身體を取り放した時に、我と名づけ得る者は、一つも見當らぬではなきか、全く此五尺の體は地水風火の四大原素の假和合物でありて、實は一つの影だもなくして、喜怒哀樂愛苦欲の七情は其假想の感情に過ぎない、それが朝から晩まで附き纏ひ、千變萬化して種々なる幻想を現し來るに過ぎない、斯る少さき我、即ち利己心と云ふものがありては、詰り萬物の靈長たる公明心を發揮することは出來ぬ、私が窃に軍人社會に於る議論を聞きまするに、戰爭は一方にては名譽と云ひ、一方にては義務と云つて居るも、是れ等は即ち假想である、そが假の心を打破りて、自分持前の心一つを發揮するのが、是れぞ自我實現、無我即ち大我であるのである、飽までも假想を打毀なくては、眞相の我體を見出すことは出來ぬのである、是を一家の涅槃那、所謂常樂我淨と云ふので、斯く死生の界を飛越へて眞の大我の境界に出ることを得たなら

ば、戰爭するにも名譽の爲でもあらねば、義務の爲めでもなし、何かなしに國家を存置する爲には、彈丸雨注の間も何かあるべき、劈肌凍眉の烈寒も何かあるべき、火に入りても燒く能はず、水に陷りても溺るゝ能はず假令身體が碎壓けても何かあるべき、凜乎たる一片の理想は、天地に充滿し、千古に渉りても、消滅するものでないと、云ふことを悟るのが、即ち大我である、廣瀨中佐は此の血誠を以て軍神と仰賞せられしにあらずや、是れ等は以心傳心自己の心念を究め、假想の疑と、畏怖心とを脱却し、自己の一心明かに裁斷せんか、「兩頭俱截斷、一劍倚天寒」である、時宗も正成も、此の一心を以て一代の事業を成就されたのである、こう云ふ心で以て戰はんには、死して憾なきのみか、却て大なる喜びがあるのである、今日は理屈張りたことを喋言ましたが、此より無形上の追弔會に移り、御經を讀んで無量無邊の功德を修行しませう云々。

第十三編　世界將來の宗教

一、國民信仰心の興起

我帝國の現狀は、國民一般が我輩は無信仰であるとか宗教は愚婦愚夫の事、文明の青年の與る處で無い等と謂ふて、誇つて居た時代が過ぎて、盛んに宗教を叫び、信仰を呼ぶ時勢となつて居る。

抑も國民一般が斯の如き狀態に至つた原因は、種々あるであらうが、時勢の推移と國民の知識の進歩とは其重なるものであらうと思はれる。「日清の戰役から續いて日露の戰爭の樣な廣大な事件は、いたくも帝國の時勢に變化を來し、文藝と謂はず科學と謂ず、政治經濟あらゆる社會現象の上に、多大の變動を惹き起し非常な勢力を以て民心を動搖變化せしめた、其結果國民の知識も非常に進歩したのである。

或る程度迄知識の度が進歩して、其處に心理の變態を來す事は、獨り國家全般の上而已でなく、個人の上に於ても、同一の徑路を取るものである。

我國民がまだ歐洲の物質的文明を輸入するに忙はしかつた時代は、即ち無宗教無信仰を誇つた時代であつて、旺盛な知識の慾望に驅られて居つたので、宗教も信仰も無いのは當然の事である。けれども知と謂ふ事には限りある事で、何種の科學にしても、以て廣大無邊にして深奥なる大宇宙の事象を悉く探究し盡さるるものゝ在る筈は無い、或程度迄進めば疑問の境に入るのは、少なくとも現今科學の狀態である。故に科學的知識を迎つて進んで往つた國民が、限りも無い疑惑懷疑の雲霧の裡に踏み入たのは、蓋し當然の運命であると思ふ。

個人の上にも又同じ事で、青年時代の知識の慾望に驅られて猛進する

時期には、竟に四面悉く疑惑の妖雲に襲はれ、懷疑不安の苦悶に陷るは、古今何人の傳記に徵しても、得て有り勝な事柄である。

此煩悶苦惱を慰安するには、知識は最早何等の力も持たぬ唯賴る可きは宗教の力である。

這の間の消息は、大聖孔子が自己の一生涯の道程を說いた言に徵すると頗る趣味があると思ふ。十五にして學に志し、三十にして立つと謂ふた時代から、四十にして惑はずと謂ふ時に至れば、已に知識的向上の生涯より轉じて宗教的信念の路程に入つた事が解る。其より五十にして天命を知ると謂ふ時代以後に到れば宗教的大慰安大悟得の狀態で、所謂至高至樂の境であると思ふ。

我國民の乘じ來つた時勢の推移と知識の進歩とは、國民をして竟に宗教信仰を叫ばしむるに至つた。斯の如き國民の進歩は、獨り帝國に於て

のみに非ず、世界何れの地方に於ても同じである、此の不斷に推移しつゝある社會と接觸して行く宗教は、又時々刻々推移して行かねばならぬのは當然の事で歷史は確かに是を證して居る。

二、我宗教界の將來

然らば我宗教界の將來には果して甚麼現象が起つて來るであろうか、斯の如き大問題は輕々に斷じ去り得べき事で無いが、平素考へて居る理想、否理想といふのは餘りにおこがましい事であるから空想と謂ふて置こうか、其空想の概略を述べて見やう。

抑も世界孰れの宗教を問はず、其出發點に於ては悉く同一のものである。博愛とか慈悲とか、名目に於ては大いに異つて居るが、宗教本來の面目に至つては、到底同一のもので無けばならぬ。語を換へて申せば、學說

に於ては差異あれども、宗教其物の實體に臻つて悉く同一の點に發して居る。で外觀の種々なる附着物は、全然黑と白との樣に思はれるものもあるが、其起點が同一であるとすれば、歸着する處に到れば、亦何等の齟齬もなく渾然として相融和しなければならものと思ふ。

然しながら、現今の社會が果して何れの點まで進歩發達して行く可き哉、それは到底今日より測知し得べき事でないが、人類が此の地球上に各各國家と謂ふ形體を保つて行く以上は此間に相接して行く宗教は、此國家と相衝突しない、即ち此國家を抱擁して行く可き性質のものでなければならぬ。

或は絶對者の眼中には、人類各國家といふ樣な形體に據つて相對立して行く事は、甚ぞ兒戯に類したものであるとの觀を免れぬかも知らぬ、否一切平等でなければならぬかも知らぬ、此點に於ては、或る種の宗教は、國家の存在を許さぬ、少なくとも國家なる者と衝突する事になる。けれども我佛教に於ては、平等即差別といふ理法の下に、一面に於ては貧もなく貴も無く、尊なく賤なしではあるが、其裏面には、整然たる差別ある事を說いて居る。即ち柳は綠にして榮え、花は紅にして榮ゆる。高き山あり低き川あり貧富尊賤悉く備つて居るので、平等と謂ひ差別といふのも要するに眞理の兩側面を表した言に過ぎぬのである。我佛教は一面に於ては世界的の宗教であり、他面に於ては國家的の宗教である。是は單に國家なるものゝ宗教との衝突什麼に就いての一例であるが、將來に於て諸宗教が、渾然として融和するとしても、其枝葉の點に至つては、彼此各相削ぎ相採つて行くであらうと思はれる。

三、佛耶兩教の長短

簡略に言へば將來の宗敎は、『感じる』『悟る』と謂ふ點は是を佛敎に取り、斯くして得た處を人道として發揮する點に於ては是を耶蘇敎に取つたものであらうと思はれる。吾人佛敎徒は、我佛敎の敎理に於ては確かに彼に勝つて深奥であると思ふて居るけれども、其深奥が却つて短處となり、是を人道として發揮する事に於ては、我彼に讓らなければならぬと認めて居る。是は兩宗敎の歷史が大いに關係して居る事で、是等長短の事に就ては、獨り將來の宗敎に於て而已ならず、我佛敎徒の如きは現下大に學ぶべき事であらふと思はれる。

由來衆生濟度といふ大業は、從來に於ける我佛敎徒の如く超然社會の外に立つて居る樣な事では、方法甚だ迂遠である。是からの僧侶は頭髮を剃るとか、法衣を纏ふとか謂ふ舊慣に拘泥せず、妻帶もし肉食もし、羽織袴フロックコートも着る勢で、自から社會に出で社會に交つて相共

に推移進歩して行かねばならぬと思ふ。然し自分一個は舊慣に依つて敎育され、そして信念も得たのであれば、中途より社會に投ずる事は斷じて爲ないつもりである。或は社會に乖き自己に乖ひて居るので無いかと謂ふ非難を蒙るかも知らぬが、形に於ては乖ても、精神に於ては決して相そむかぬつもりである。

それは兎に角、出立點の同一である諸宗敎が將來に於て相一致し、佛敎の眞とする處、耶蘇敎も是を眞とし、耶蘇敎の否む處、佛敎も拒むと謂ふ境に達し、彼此融和する處は、果して何處にあらうか、是が又一の問題である。

四、世界將來の宗敎に對する我國の使命

世界の大勢より打算し來つて、將來に於ける我帝國を觀すれば、將來の

宗教融和渾成の地として我帝國は蓋しその處であらうと思はれる。東洋文明の精華宗教の精髄は確かに帝國に蒐められて居る。此處に西洋の文明宗教は大河の流の如く注いで來て、獨り宗教而已ならず、百般の文物東西の文明が相衝動して、大調和の域に達するのではあるまいか。目下東京に開かれて居る萬國基督教青年會の如きは、將來に於ける大調和に達する道程の一動脈と見なして宜からうと思ふ。斯の如き意味に於て、吾人は萬國より來會せられた青年會の代表者、更に又救世軍のブース大將の來朝等は、滿腔の誠意を以て歡迎するのである。（「成功」第十一卷第四號所載）

第十四編　禪の要旨

一、禪と人性

禪とは何ぞと云へば、禪者心也である。それ故人は生れながらにして禪を備へて居て、學者には學者の禪、酒屋には酒屋の禪、米屋には米屋の禪がある。廣義から云ふと殆ど各人に有してゐないものはないと云つてもよい。さて此の心と云ふは何であるかと云ふに、古註に從へば心とは心の姿にあらずして、心の本體なりとある。愚僧に云はすと心は妙なりで、思想感情の最高潮に達したのを云ふのである。故に到底是を言句を以て形容することは出來ない。其角が芳山の一望唯櫻花の爛漫たるを見て『是は々々とばかり花の芳野山』と云つて居るが、即ち此の心境である。

然るに世間では禪の事を色々誤解して禪學などゝ云ふて居る。禪は決して科學ではない、宗教である。學問と云ふよりか修行である。云ひ換へれば知の働きではなくて身を以て努力すべきものである。今の詞では精神上の實地の經驗とでも云はう。更に甚だしきに至つては、加藤博士の如き學者ですら禪は催眠術の一種であると云ふて居る。愚僧は是を聞いて一個の門外漢として一笑に付して置いたが、能く考へて見ると世間には隨分似て非なる野狐禪なるものがある。知の發動を止めて枯木の如く殆ど死人の情態に心を止めて居る。斯くの如きものは道にあらずして術である。決して眞に禪の本旨を得たものとは云はれない。

二、禪の五種

宗密禪師が禪を五通に別つて居る。第一が外道禪、第二が凡夫禪、第三が

小乘禪、第四が大乘禪、第五が諸佛頂上の禪である。此諸佛頂上禪は一に一行三昧或は又、最上乘禪とも云ふ。

外道禪は恰も印度の波羅門教に於けるが如く、只管此の厭ふ可き黑土を去つて淨土に行かん事を希ふの餘り、身には異形の裝を施し一週の間食はず飲まず眠らずといふ狀態にある。更に甚だしきに至つては一本足にて立ち通しにするとか或は又百尺竿頭に登るといふやうな、實に愚昧極まる苦行をやるのである。斯くの如き迷信は古今東西を通じて世に盡きない。是が即ち外道禪である。

凡夫禪には迷信はないが、矢張常識の上から考を立てゝ、早く天國へ行きたいといふ因果の理法に律せられて居る。

小乘禪は自利上の坐禪であつて、自我の滿足の爲めには世界は何うならうともよい、唯自分の滿足を以て無上のものであるとして居るので

ある。

是に反して大乘禪は全く利他上の坐禪であつて、自我の滿足處の騷ではない、是を小にしては一家一社會、大にしては世界人類の爲めに貢獻しやうと云ふのである。菩薩の位にある人は即ち是に相當する。

若し夫れ諸佛頂上の禪に至つては、小我は大我に沒し大我は小我に沒入して、自利々他の區別などは全くなくなつて、三界は我有也と佛の仰せられた如く、此の世に生きとし生けるものは皆我が子の如く愛するのを云ふのである。是を倫理的語法を以て云へば、至善の境にあるものを指すので、是が佛の極、禪の極致である。

三、禪的修養の極致

斯くの如き極致に到達せんとするには七情を拔去らねばならぬから、

勢ひ其人の心は死灰のやうになると思ふものもあらうが、それは大きな誤である。一旦悟を開いたものは、今迄厭ふ可き七情と思ふてゐたものが、今度は實に愛すべきものとなる。王陽明の語に『耳目見聞は外賊なり、情慾意識は內賊なり、只それ主公惺々不昧、中房に獨坐する時は賊即ち化して家人となる』とある。是れ其の場合に於ける情態を適切に云ひ現はしたものである。迷と悟とは別のものではない。迷へるものには七情となり、悟れるものにはそれが智となり光明となる。是を譬へて見れば、澁柿を湯に漬けて置くと甘くなるのは、澁があるからこそ甘くなるのである。それと同樣に悟れるものには今までは厭ふ可き七情も、遂には愛す可きものとなるのである。故に眞に禪に由つて悟入したものは、決して死灰のやうなものではなく、血あり涙あつて人類に臨むやうになるのである。世には遠く俗塵を避けて山に入り、獨自らを高うす

るものがあるが、それ等は禪の本旨を得たものと云はれない。禪は何處までも血あり涙あつて、俗世間のものを救ふといふ大慈悲心のあるものでなければならぬ。世間と離れて禪を求めんとするのは大きな相違である、御經にも治生産業皆佛法と違背せずとか和光同塵とか或は又入塵垂手とか云つて、心は御佛のもとにあつても此の俗世間に交つて何處までも俗世間の爲めに盡すといふ事を述べてある。又動中の工夫は靜中の工夫に優る千百倍なりとあるが、是も亦同じ心である。

以上述べた如く、全く悟入の境にあるものは厭ふ可き七情も愛すべきものとなつて俗世間の爲めに盡すことが出來るが、また禪の要旨を得ないものは如何にして此の困難多き社會に處して行くかと云ふに、自分の從事して居る事に全心の熱誠を獻げて、最も敬虔に最も丁重にやるのである、初めの間は隨分困難の事もあらう。併し毎日々々試驗を受

けてゐるのだと思つて我慢して、一難を經ては一勇を鼓して行く、かくして進むと、今まで逆境と思ふたのが逆境でなくなり、難事であつた事も難事でなくなつて、外目には隨分困難に見える事も自分には一種の快感となつて來る。さうなると艱難汝を玉にすで、遂には禪の要旨を會得するに至るのである。

禪宗の古德が「一日なさざれば一日食はず」と云つて居るが、此の心懸けで物事をやれば、禪を修行するに態々山に入る必要もなければ、寺に入つて僧となる必要もない。（「成功」第十四卷第一號所載）

第十五編　産業と宗教

一、産業の意義

産業と宗教と題して一場の講演を試みんとす、この産業とは英語にてはインデンストリーと云ひ、通常譯して實業と云へるが、若し實業と云ふことが眞實の業務と云ふことゝせば、これに反して眞實ならざるの業務と云ふものもあるべきことゝなりて實業てふ意味は明瞭ならず、寧ろ産業と稱すべきか。産業とは之れを熟字にすれば殖産興業と云ふことなり、商業にても、農業にても、工業にても、實地の利益を奬むるものを云ふ『法華經』の中に

治生産業實相と違背せず

と云ふもの、すなはちこの産業の名目と義理とを示せるにあらずや、さ

れどかゝる實業、或は産業てふものゝ名目や定義はこれを問はず、方面を轉じて、我國古來より最も誇りとすべきものは何ぞやと考察せよ、我國天然の氣候の如き、風俗の純朴なるが如き、人情の敦厚なるが如き、山水の明媚なるが如き、學術、宗教上に於ける特種の發展の如き其の他法律上、政治上に於ても誇りとすべきものは多々これあらん、然れども他より見て、これこそ日本特有のものなれこれこそ實に日本の名物なれと稱するものは何ぞや、必ず諸君の念頭に思ひ浮ぶものあらん。

二、本邦に於ける武士道と實業道德

曰く、武士道これなり。武士道は日本固有の道德を發揮せるものなり、外國に於ける學者、政治家、宗教家の如きも、武士道は日本固有の特性として之れを許せり、たゞに之れを許すのみならず、武士道に關する著書、頻

々として顯はれ、英佛等の語に譯せらるゝにても、其の如何に彼の國人がこれを尊崇し、珍重せるかを知るに足らん。此くの如く武士道は過去に於て能く發揮されたり、武士道の發揮せられたることは吾人の大に誇とすべきの事なり、されど他の方面を觀察すれば果して如何、武士道と稱する一種の高尚なる道義的觀念のありしが如く、他に商業道とか工業道とか、農業道と名づくべきもの存せしか、この語、或は多少の語弊のあるやも知らざれども、兎に角武士道てふことに對して商業、農業、工業等が平行せりやと云ふに吾人はこれに對する答は躊躇せざるを得ざるなり。

工業、商業、農業の方法は或は大に發達せしならん、されど、工業家の道德、商業家の道德、農業家の道德は之れを武士道と對して大に遜色ありしは云ふ迄もなきことにて、今日にては既に死語となれるものなれども、

古來より我國にては或は百姓と云ひ、或は商人と云ひ、一層これを輕侮して彼れは素町人なり、土百姓なりと稱せしことあり此の如き言葉は農工商の道が發達せざるの證據なり、我は町人なり故にコレシキの事にて人を欺くも大事なし、我は百姓なり禮儀作法を知らざるも大事なし、我は職人なり、コレシキの不品行をなすも搆ひなしと自ら侮り、以て人に侮らるゝやうになれり、彼等は恬として耻ぢざるの行動をなしたることが今日に至るも其の餘習全く去らざるなり。今日學校にあるものが理想とする處は將來、幾何かの月給を取るものたらんとするにあらずや官吏たらずんば會社員とならんとするにあらずや學生が斯く考ふるのみならず、學生の父兄も亦斯く思ひ、我子は幾年間學校に學ばしめたれども未だ月給を取る能はずとて慨くものさへあり。海を隔てし亞米利加にありては大に之れに異なり、オフイサ即ち官吏なるものは

備人と云ふ考にて御役人樣、官員樣などゝ尊ぶものなし、尊ぶ處はマーチアントにあり、トラテスマンにあり、大統領も國務卿も、大學の總長も知事も皆實業家より出づるなり、獨立自營の人、勤勉の人、熱誠なるインテントマンを尊崇するなり。日本にては今日もなほ官尊民卑の弊あり、たとへば行賞の如きも多くは官吏を先とし、實業家を後とせるが如きはこの餘習ならずとせんや、されど現代の日本人は最早や月給取のみを尊ぶべきの時代にあらず、一個獨立の實業家が大いに勢力を占むるの覺悟なかるべからざるなり、然らずば如何に陸海軍を擴張するも之れを支持すること能はざらん。

されど事實の尙ほ之れに反する事の多きは遺憾なり、現に予が住せる鎌倉の如きも、横濱に近くして外人に接することも多きが、今日なほ外人に對する價格を內國人に對するものより高くするが如きものあり、

また商品を輸出するにも初めの見本よりも一回二回、輸出の度を重ぬるに隨ひて漸次に粗惡なるものを送るが如きは、商業道德缺乏せる證にあらずや。外國にありて常に聞くことなるが『獨逸の品物は堅牢にして日本の品物は粗惡なり』と云へり、外國にありてかゝる語に接せば吾人日本に生を享けたるものは、一種の不快の念に打たれざるを得ず、又我國內にても東京の品物よりも大阪の品物は粗惡なりとは一般に云ふ處なり。予は東京近く住せるが故に云ふにあらず、かゝる惡習は一日も早く、改められたきものなり、その大阪たると何れたるとを問はざるなり。たとへば一個の革鞄にても、價格低廉なりとするも、直に手が拔けるが如き品物は客に對して親切なるものと云ふべからず、今日は最早、只價格の低廉なるものゝみを尊ばず、堅牢にして永久的なるを以て客に對するの親切なりとす、然るに商人が自ら欺き、又人を欺きて一時を

糊塗するが如きは之れ產業家自らを侮るものにあらずや。內地人に親切なるものが外人を欺き、外人に高價に賣り附け恬として耻ぢず、親孝行と稱せらるゝ人が外人を欺き誑かして顧みざるは之れ日本人の缺點にあらずや。予は此くも日本人の缺點を羅列したり、その美點また少しとせざれども、吾人は先づ自己の非を悔ゐ改めて他の美事善行を學ばざるべからず。古來武人の間には爛熟たる櫻花の如く、また玲瓏たる富岳の如き、武士道は發達せるに關らず、農、工、商の間には何故にかくも罪惡の瀰滿せるか、思ふに農工商の道德の發達せざるものは宗敎心の發達せざりしに歸因せずんばあらず。

三、我國人の宗敎に冷淡なること

當地方よりは布哇、或は亞米利加にスクールボーイ或は勞働を目的とし

して出稼せるもの多しと聞く、然るに彼國に至れるものゝ能く遭遇することは彼國にて宗敎を檢べられて、これに答ふるに窮すと云ふことなり。我國にては無宗敎なりと公言し、或は宗敎に冷淡なりと云ひ恬として耻ぢざるもの多し、否、宗敎に冷淡なりと云ふは尙ほ食物に濃厚なるものを好まずと云ふと同一なりと考ふるもの多し、されどかゝる思想は今日より二十年も以前のことにして、今日にては最早宗敎の必要なるを感じて無宗敎なりなどゝ放言するものは一部の時代後れの人を除きては恐らくはなかるべし。

凡そ人の萬物に長たる所以のものは崇高なる信念あるが故なり、その佛敎を信ずると耶蘇敎を奉ずるとは措いて問はず、崇高なる信念ありて初めて他の動物に長たる所以を發揮するに足らん。然るに佛敎信者の家に生れたるものが彼國に至り、耶蘇敎信者なりと云へば何等かの

利益あらんと考へ漫に耶蘇教信者なりなど答へたるものもあるが、彼のラッド博士の如き、或はハリソン博士の如き人より『日本には祖先教あり、佛教あり、孔子教あり、神道あり、然るに如何なる事情にて基督教を信ずることゝなりしや』と尋ねられて、これに答ふる能はずして窮せるものもありと聞く。

要するに日本人の宗教に對するの感想は誠に輕薄なり、宗教を信ずるの心なくして、唯た利益の爲め、若しくは學校にて優遇せられんが爲めとか、若しくは英語を學ばんが爲めとか、外國の事情に通せんが爲めとかにて一時耶蘇教に入るのみにて眞に熱誠なるものは誠に少なし、日本傳道よりも朝鮮支那若しくは印度地方の傳道は遙に上位にありとは耶蘇宣教師の常に慨嘆する所なり。かくも不誠實にして眞面目ならざるは大に慨嘆すべきの至りならずや。宗教の特色とする所は、現在一

世にあらざることなり、現在および將來、即ち現當二世に亘りて誠實の心を以て働くにあり、一時の利益に暗まされずして永久不變の靈光を仰ぐにあり、或は神に對して敬虔の念を拂ふが如きも、又は佛の無限大悲の慈光に接して、自己の貪慾瞋恚愚痴の煩惱を洗滌し、天眞の流露し來るものも宗教の特色とする所なり。然るに無宗教者にありては、かゝる麗はしき精神あるを見ず、一時の利益を得れば後はどうなりても宜しと云ふものゝ如し、之れを犯罪人の統計上より考ふるも埼玉縣の如きは殺人罪、放火罪の如き殺伐なる犯罪人多く、新潟縣の如きはかゝる殺伐なる犯罪人の少なきものは一は宗教の未だ普及せざると一は宗教の普及せるとに因らすんばあらず、こは尙ほ消極的の結果なれども、若し積極的に云へば、無宗教者には卑劣なる手段を取りて一時を糊塗し、外人を欺くと云ふが如き者多く、また宗教信者にはかゝるもの少な

し。また之れを君國に對する感想上より云へば宗教信者は　天皇陛下に對する忠誠は云ふ迄もなく、高く神に對し、佛に對しても正義の爲には自己を犧牲にするも誓つて戰はざるべからずと云ふ決心を有するにあらずや。

四、宗教と人の決心

予は三十七八年役に暫く從軍布教せるが、當時露國の捕虜に對して、何故に戰へるやと問ひしに、皆曰く『神の爲めに異教徒を戮するにあり』と。以て宗教が決心を造るの如何に偉大なるかを知るに足らん『死は鴻毛よりも輕し』と生を輕んじて君命を重からしむるものは實に宗教的信念にあらずや。見よ天下を席卷したる豪傑、信長の如きも、石山寺に立籠れる一向宗徒の爲めには力屈したるにあらずや、これ命を佛陀の前に

捧げたる大決心を有せし一向宗徒の力によらずんばあらず、故に家康はその抗すべからざるを見て、淨土宗や天台宗徒と結びて自己勢力中のものとせんとせり、實に宗教の偉大なる力ある以て知るに足らん。宗教の情想は感謝の念にあり、難有しと云ふにあり。

五、宗教と實業道德

神の德、佛陀の慈光に對して有難しと云ふ情想ありて茲に初めて猛然たる勇氣起り、火も燒く能はず、水も溺らす能はざるなり、この心を以て農家は農にいそしみ、商家は商をはげみ、工業家は工をつとめたらんには積極的の功果を認め得べきこと必せり。然れどもこの宗教上の信仰も害用せられては或は現在のみならず、未來までもとて青年男女が、痴情の果に一蓮託生などゝ來ては誠につまらぬ極みと云ふべきなり。

凡そ宗教は有難し忝しと仰いで信ずることを得るものは誠に幸なれども人々機類萬差なるが故に、一面には解信よりも入らざるべからず、經文にかく仰せらるゝが故に信ずとか、バイブルの教ゆる處は此の如きが故に信ずるとかと云ふは仰信なりこの仰信大に可ならざるにあらざれども、迷信に墮せば或は其の害毒蛇惡龍に勝るものあらん、彼の惡祈禱によりて病氣は平癒さるゝものと信じて醫藥を仰がざるが如きものはこの害に罹れるものにて、かゝる迷信は大に排斥せざるべからざるなり。然るに佛教には此の解信と仰信との二門を開けり、この仰信門には念佛宗あり所謂、淨土宗とか淨土眞宗と稱するものはこれにして、解信門とは所謂聖道門と稱するものこれなり、然るにこの二門は其の主とする處異にして聖道門は目ありて足なきが如く、淨土門は足ありて目なきが如く、具足せざれば用を辨じ難し。淨土門の本領は慈悲

にあり、聖道門の本領は智慧にあり、佛教は此の智慧と慈悲とを具足し、慈悲の裏面の教義を根底とし、智慧の裏面には慈悲を攝めて不離不二の妙趣あり、然るに佛教以外の宗教にありては神の慈悲を云ふも智慧のことを語らず、智慧を研くことを以て宗教以外のことゝせり、故に科學と宗教の衝突は必然の結果として避くべからざることゝなれるなり。獨り佛教にありては智慧と慈悲を雙修し智目行足として平行線として進ましむるが如くなれり、これ釋迦が初めて拵えたるものにあらず、宇宙の眞理は實に一面には智慧となり一面には慈悲となりて發露するが如く圓滿なるものなり、或は之れを心理學者は智情意の三に區分し或は儒教にては智仁勇と云ひ佛教にては戒定慧の三學と云へり。

凡そ佛教にては、佛陀と吾人と其の根底は同一なりと見れども、外教に

て神と人とは全たく別なるものとなせり、ゆゑに智慧を研きて宗教の眞味を解するが如きことは到底出來ざることゝ思へり。然れども佛教には「奇なる哉、一切衆生、如來の智慧德相を是足せり」と云へり、一切諸法の根底は平等なり、然るに若し、神と人を以て永く異なるものとせば論理上の矛盾を來すは云ふ迄もなく神人合一の理想の如きは架空のものとなり終るにあらずや。かゝる議論は比較宗教學上のことにして暫く之れを措く、國家は殖産興業、隆盛ならざれば發達せず、吾人は大に此等の點に注意せざるべからず今日、日英同盟は締結せられあるも、我國と英國とを比較せば、殖産興業上に於て、生活に於て、學術上に於て、或は道德上に於て、其逕庭の甚だしきこと豈にたゞに數等の差のみならんや、日英同盟の如きは唯一時、我國の利益及び英國の利益を擁護せんが爲めに設けられたる政略的同盟のみ、これを彼國と同一の地位に達せ

しむるには殖産興業を盛んにして生産力を增加せざるべからず、生活の程度を高尙ならしめて實着ならざるべからず、學術上、教育上、政治上等にも幾多の進步發展を見ざるべからず、或は道德上に於ても公共的、社會的の道義を振作し、英國を凌駕せざるべからず。

機械力を應用して生産力を增加することも、學理を應用することも必要は必要なれども、更に必要なるは宗教上より武士道の如き立派なる道義が、商業なり、工業なり、農業なりの上に亘りて完全なる日本の道德を發達せしめざるべからざることなり。從來一部の人は佛教を以て全く悲觀的の者なりと取扱ひ、未來の爲め、死後の用意の爲めに入用なるものとせり、かくて佛教は厭世教なりと云はるゝに至れるが、佛教はかゝる一方面のみのものにあらず、これも一部の眞理を道破せるものなれども、厭世に對する樂世的方面あり、大乘佛教は主として之れにして

前に述べたるが如く、宗教の信念が基礎となりて、社會上に於ける活動の原動力とならば、これ所謂『煩惱即菩提』なるものなり『娑婆即寂光土』なるものなり、大乘佛教の本意これに外ならざるなり。(完)(四十年十月)

第十六編　坐禪の必要

一、坐禪とは何ぞや

此の坐禪と云ふことは禪宗計りではない如何なる宗旨でも如何なる學問でも皆此意味が籠つて居る英語の本には之を「クワイエット」とか或は「メヂテーション」とかさう云ふような字が書いてある、さう云ふ意味は是非共なければならぬ。

吾々が未だ小僧上りの乳臭い中に素讀を覺へた、彼の大學――大學の一番冒頭の言葉を借りて來てもチャンとそれが具へある、大學の道は明德を明かにするにあり、民を新にするにあり、至善に止まるにあり、止まることを知つて而して定まり定まつて而して後に靜なり、靜にして而して後に能く安し、安ふして而して後に能く慮る、斯う云うことがあ

りませう、是等は言ふた人が違ひ其行はれた國が違ふから坐禪とは大層品物が違ふが如くに一寸見えるのですけれども靜に考へて見ると殆ど此大學の冒頭の一章と云ふ者は坐禪法を勸めたと云ふても宜い位の言葉であります、凡そ立派な紳士とか大臣とか云ふ、それだけの資格を具へるにはどうしても是れだけの考がなげればいけぬ、明德を明かにすると云ふ、丁度斯う云ふことを佛敎の方へ當嵌めると言ひ方は違つて居るけれども眞如と云ふても佛性と云ふても菩提と云ふても涅槃と云ふてもそれは百も千もあるですが詰り吾々も同じものに使つて居るのです、外部の誘惑と云ふか外界から出て來る刺戟と云ふか、さう云ふものゝ爲め殆ど明德を昧まして居るから第一明德を明かにすると云ふことが目的である、既に己れ明德を明かにしたならば推及ぼして民を新にすると云ふにありと云ふ、若し初めの明德を明かにすると

云ふことを自利と云ふやうな方へくつ附けるならば民を新にする方は利他で、自利と云ふても利他と云ふてもやはり一つの吾々が勇猛精進に進んで行く、今の言葉で云へば向上心、努力心一つの「エネルギー」なるものゝドシ〳〵進歩向上して行く、其上に兩方面から名を與へたと云ふても宜い、自利が先き、他利が先き、何れが先き何れが後と云ふことは一の銘々勝手の議論に過ぎぬ、どうしても是は相兼ねて居る、幷び行はれて往かなければならぬ、第一先づ明德を明かにして而して民を新にする所謂自信敎人信である、己れ先づ之を信じて、さうして人をして信ぜしむる、己れが明德を明にし、民の德を新にするのです、言ひ換ゆれば人の明德を明かならしむると云ふて置いても宜い、自利と利他と相待つて至善と云ふことに至るのだらうと思ふ、至善に止まるのである、凡て目的を達せむと云ふには一つの實行法がなくてはいけない、斯う云ふ明

德、新民至善と云ふ一つの者又言換へるならばこういふ的を掛けた以上には之を一つ認める所の實行法がなければいかぬから後の五箇條が出て來た、止まるとを知つて而して定まり、定まつて後に靜なり即ち止まる、定まる、靜に、安し、慮ると云ふ五事でありまする、是が實行、法若し此五文字が未だ多過ぎると云ふならば靜慮と云ふ字にしても宜い、斯う云ふとを當嵌めて見ると云ふと、もう禪宗だとか佛法とか言はいでも既に支那の國では孔子が先づ明かに斯う云ふ禪定法を一つ遺して居つたと云ふても宜しいのであります、惟ふに孔子などの學問と云ふものは學藝に重きを措かずして實行法に重きを措いてあります、又三千年の今日に至るまで孔子生前の感化を遺して居るのは全く實行法にあるだらう、其學藝に至つては今日から云へば實に幼稚なものと云ふても宜い位であるに拘はらず、千歲どころではない、二三千年の今日

に至つて歷史が古くなればなる程此一つの精神上の「インプレス」と云ふ者が益々新になると云ふは何處にあるかと云ふと、是は實行法にあると云ふて宜い、話が支那の方へ向いて行つたですが、支那の國あたりにあつても既に孔子が斯う云ふ手本を出したのであるから、段々後になつて唐宋と云ふ時代になつて來ると云ふと丁度内にあつた斯う云ふ寶物を更にかの他山の石を持て來て磨くやうな斯う云ふ機運に際會して今の達磨宗――禪宗を專門にすると云ふやうなものが出て來てそれが丁度儒教と禪宗が殆ど、賓主地位を別つとが出來ぬ位密接に互に相助け相待つて一つの妙な新機軸を出し、新學說を唱へ出した、彼の大極無極と云ふ說も其一です、何處から出來たと云ふと皆禪宗通は彼の儒教の道具を餘程能く用ひて居る、又彼等儒者なる者は此禪宗の宗意を儒教の方へ持込んで大變融通されて居ると云ふことはアナタ

方が其時代の歴史に眼を注がれた以上は歴々として何れの書物にも此意味が現はれて居る、殊に王陽明の一派は殆ど變形的の禪宗の如く思はれる、或坊さんに就て入室した譯ではないけれども、然れども其爲す所は暗合して居る、王陽明ばかりではない蘇東坡でも其他あの時代の先生達は此一つの精神修養法と云ふか、平たく云へば工夫鍛練法と云ふか斯う云ことで以て大變な一つの感化を遺して居ります是はマア支那に於ける所の禪宗のイロ〳〵の方面で働いた一部分のことを思ふに任して言ふたのでありますが、段々アナタ方が研究して見られると例へば今行はれて居る大きい宗旨、印度のバラモン教であるとか、或はもう少し西の方へ行つて彼のマホメット教であるとか或は耶蘇教であるとか色々の宗派は、必ず一つの禪定法と云ふものがある、靜に我が身心の狀態を觀て靜なる境涯とする斯う云ふ意味の禪がある又

是れは必要です。

二、坐禪の必要

よし專門的の禪で無くとも諸君が二分間でも三分間でも諸君が身體をして先づ不動の地位に立たしめ、心をして其の寂定の境涯に置かしむると云ふことは大變に善いことであらう、私が言ふまでもない素人でもイロ〳〵の効果がある、其のイロイロの効果のある方を先づ後にして、置いて、極く消極的の効能を言ふても、人間には休息と云ふことが大變必要なのであらうと思ふ、私は是だけの時間を無駄に休む息けたと云ふならば是位どうも惜むべきものはないのですが、息けると云ふ形と休息と云ふ形が殆ど形に於て相似たるもの、所が其精神の狀態に於ては殆んど氷炭相容れぬ別な所の有機、其の休息と云ふことは植物

界、動物界あらゆる生物界に於てなければならぬ筈の者であるが、殊に人類界に至つて休息と云ふとの効能が益々現はれ來つて居る、又た野蠻時代に於ては此休息と云ふとは左程必要ではなかつた、所が野蠻から未開と云ふか半開と云ふか段々文明に進めば進むに從つて人間が大變複雜なる仕事をしなければならぬ、隨つて多忙になつて來る、多忙になればなる程人間には休息と云ふとが愈々益々必要になつて來るのであります、生理學上の作用に於てもさうです、吾々が此處へ來て何を言ふて居るか思ふに任して自分から殆ど自覺を失つて話をして居るけれども、朝ムックリ起きてから大分仕事をして此處へ來て諸君と晩合つて話をして兎も角も活動して居る、斯う云ふ活動力は何處から來たと云ふと昨夜能く休息した、それが現はれて來る、此處で饒舌つて居ることの原因はやはり休息に置かなければならぬ、斯う云ふ意味に於

て大いなる仕事をしやうと云うならば大いに休息しなければならぬ、活潑なる仕事をしやうと云ふならば寂靜極まつたる所の休息をしなければならぬ、伸びんと欲するものは必ず屈せねばならぬ、放たむとするものは必ず控へねばならぬ、斯う云ふことは見易い道理ぢやが、人間は割合見易い道理に氣が付いて居らぬからそれから來た結果かも知れぬ、時々瀧の中へ飛込む輩もあれば噴火山の中へ飛ひ込む輩もあり、鐵道往生をする人もあるが、人間が大いに働かむとするのには大に休息しなければならぬと云ふ是だけのことに氣が付いた、餘り氣が付き過ぎて氣が付いて居らぬ、此處へ少しく氣が付いて居るならば如何なる繁雜極まつた中に於ても、どう云ふ複雜なる事務の中に立つても、昔からよく言ふとほり八島壇之浦の斬ッつはッりつの中でも大寂定中と云ふエライ禪宗式の必要があるこれらは大言壯語して居るやうだけれ

ども少しも大言壯語ではない當り前のことを言ひ現はして居るのです、又心理學上で云ふならば妬ましいとか恐ろしいとか其他色々の根性を悉く撲滅する効能を有つて居る兎に角禪宗を引込思案の方に消極的丈けに云ひ顯はしたときは休息と思つて居れば宜しい。（「禪宗」百四十八號掲載四十年七月十五日發行）

第十七編　雲水偶語

日本人は耐久的精神に於いて歐米人に勝つ能はず

歐米人に接し、又歐米各國の狀態を觀察して、最も深く私を感動せしめたのは、歐米各國民の耐久的精神である。即ち一旦思ひ立つた仕事、一朝目論見たる業務を如何な外來の壓迫があらうが、如何な障碍があらうが、決して其の初一念を翻へして事業を中止する樣な事はしないのである。歐米人のうちでも殊に英國人には深く此の美なる性質が代表されて居る、彼れ等は實に意志の力が强烈である、決心が不拔である、一度志したことに就ての執着力と粘着力とは實に驚く可きほどである。今私の此の感想を現代日本人の上に比較して見ると、日本人の仕事は悉

く一時的である、耐久的の精神と言ふものは決してない。學問の上でも、實業の上でも、商業の上でも、有らゆる方面悉く一時的で持續することが出來ない永遠の勝利を目的とする信用上の問題などに就て私は思はず背に冷汗を流す事が多い、十年、二十年、三十年、自己の一生涯を提げて奮鬪力を繼續することは日本人の最も短所とするところである、彼の日露戰爭の如きももう二三年繼續したらば其の結果はどうであつたか、耐久力の缺乏せる咄嗟的人種は隨分危險い位地に陷るのではなかつたらうかと疑はれる、幸にも名譽の桂冠は突然日本を世界の一等國に編入して了つたが、此際日本人が得意になつては實に危險である。此の耐久的精神の養成は、現代教育界の最大要務である、人はよく日本人が一時的で耐久的精神のないのは、本來の特性であるかの如く言ふが、決して日本人其の物の特性ではない、時代に依つて變化したのである。彼の日蓮であるとか、親鸞であるとか、又我が宗の榮西であるとか、是等の人の生涯に於ける經歷を見たならば、或は遠島の迫害に逢ひ、或は斷頭場裡の危難に立ち猶且つ自己の初一念を抛げず、飽く迄其の耐久的精神を以て鬪つたのである。同じ日本人でも意志の力の旺盛なることと驚くべきものがある、唯今人は古人に及ばぬだけで、修養を積み教育宜しきを得さへすれば、此一時的咄嗟的人種をして耐久的人種とすることも決して不可能の事ではない。

日本今日の學生に師道なし

耐久的精神が特に今日の學生に缺けて居る、是は一方から見れば學問が餘り易く出來ることになりし爲めで、讀みたいと思へば如何な書物もあり、研究仕度いと思へば如何な器械でも完備されて居るからのこ

とである、彼の四五十年前故福澤氏などが初めて英書を研究した時分は一冊の外國書を五人十人と言ふ大人數で讀み、一卷の辭書は互ひに謄寫して使用した樣な時代であつた昔と今とは其の學問の難易が甚しき爲め自然今の學生が忍耐力が少いのであらう、偖て私は此の精神の缺けて居る外に、我が國學生が共通の弊害として、萬國にも殆んど類のない惡弊として、大に反省を促さなければならぬことがある、それは今の日本の教育界に師道と云ふものが皆無なることである。苟くも學生の身として其師に反抗しストライキを起し排斥運動をなすなどは以ての外の事である、歐米各國を初め世界萬國に斯んな惡弊は見る事が出來ぬ、歐米にての師弟の間柄は常に一道の霑々たる和氣が籠つて、恰も親子の樣な有樣である、此れを目にした私には、如何して斯う日本の學生に師道の尊ぶべきことが解らぬのかと、何時も嘆聲を漏らして

居る。而して此の惡き風潮は元來教育の主旨に衝突し、教育の根本精神に背反するのである、教育界に師道を忘却することの出來ないは、恰も武士が武士道を忘るゝことの出來ず、婦人が婦道を忘るることの出來ぬのと同一である。教育に於いて師道が缺けて居たら、教育なしと言つても過言ではない。此の點に就いては吾が宗旨殊に臨濟などは、此師道を尊び重んずることが、非常な嚴格なものである、今日の禪宗では次第次第に世の惡風潮に感染しつゝあるのだが、やはり世間一般に比して師道を神聖なるものとして遵守されて居る。（新公論廿三年第壹號掲載）

第十八編　耐久學舍の所感

一、序言

私は布教のため各地を巡錫する毎に、其地方の師範校や中學や、或は他の專門學校などの請聘に應じまして一場の法話を致す事があります。其都度私は其學校の教育方針や、生徒の風儀等に關する總ての美點を成るべく觀察するやうにして居るのですが、中に就て大に感服しましたのは、去年の秋京阪から南海地方を巡錫いたしました際、偶請せられまして三日間の講話を致しました、耐久學舍のことであります。此學舍は和歌山縣紀州有田郡廣村といふ田舍に在ります一私立中學で、後方に山を負ひ前方は海に莅んで、誠に風光清絶な所で、地位から申しても青年の身心を教養するには恰好の所であると思ひます。

二、耐久學舍の概沿革　附濱口梧陵翁の事

所で今其所感を吐露するに先立まして、同學舍の沿革とは餘りに大袈裟ですが、極く簡略に其創立の次第を述べてみませう。左樣今を去る五十餘年前、彼の攘夷鎖國論の世間に八釜しく唱へられました時、諸君も御承知でありませうが、此地の濱口梧陵翁が其論に反對で、大に開港主義を主張されました。翁は矢張り有田郡廣村の豪商で、其人と爲りは所謂明達宏度博く群書に通じ、平素は好んで物徂徠の學を修められ、常に理論よりも實踐といふことを重んじた人であります。で翁は自分の主義主張を實行するには、何うしても新知識を養成するを以て第一とせねばならぬといふので嘉永五年遂に私塾を開いて之を耐久學舍と命名し、近隣の子弟を集めて文武兩道を教練し、以て大に士氣の振作に力

められた。此れが即ち今日の耐久中學の抑々の創めであります。それから少し餘談のやうでありますが、翁は豪商なるにも拘ばらず、極く衣食住を質素にして慈悲深い所から、常に私財を投じて公共事業や貧民救助に盡された爲めに、其當時の官から善行賞として獨禮格といふ資格を賜はつたといふ事です。其他先年亡くなりました滕伯と、少壯の時分からの劍友であつて、又當時の外交問題に對しても、同一意見を持つて居られた。而已ならず、翁は新知識を得るには是非共一度歐米に渡つて、大に彼の土の文物制度を視察しやうといふ志望を抱いて居られましたけれ共、當時の時勢が許さなかつたので、密航と迄も決心されたが其意を得ず、遂に晩年に至つて其宿志を果されたのです。其れは即ち明治十七年翁の六十五歳の初夏であつたのです。然るに惜しい事には、翌年病を得て終に北米の客舍に歿くなりました。好事魔多しとは此事です

が、何うです諸君!!。成程今の便利から云へば、唯着衣喫飯底の一些事でありませうけれども、明治の初年でもあり、尙且つ六十以上の老體を提げて萬里の波濤を超え、遠く米國あたりへ渡航せられたとは、實に壯事ではありませんか。まだ其他翁の事につき話したいのですが、目下同中學校長寶山氏が其履歷を、編輯中との事でありますから、遠からず出版される事と思ひます。然うなれば翁に就いての詳細は、洩れなく分かる事でせうから、私は略して置きませう。

兎に角學舍は然ふいふ風で建てられまして、爾來多少の變遷を經ます中に、明治廿五年に至りまして翁と同族の濱口吉右衞門、濱口儀兵衞(今代の)及び岩崎重次郎氏等と相謀りて時運に鑑み、こゝに普通學を施す事となりまして、舍運は漸次隆盛に向ひました。それから話し變つて現校長寶山良雄氏の舍長として赴任せられたのは、明治卅七年の三月の

ことでありますが、更に茲に至りました手續きをお話し申せば、同じく濱口家の擔といふ人が、當時の舍長吉右衞門氏の命を受けて、現今東京朝日新聞社に居られる杉村廣太郎氏に舍長たらんことを依頼されました。所が氏は自分が其任でないといふ事を考へて辭退され、更に氏の知り合ひで當時外遊中の、寶山氏は其後任者として推薦せられました。斯ういふ次第で寶山氏は、前陳の通り歸朝の翌三十七年の春、舍長として其任に就かれたのであります。

三、現校長寶山良雄氏の人物及其の教育方針

氏は性極めて溫良な人で、曾ては京都同志舍に於て新島先生の薫陶を稟け、それから東京帝國大學の文科に入つて、倫理や哲學及び宗教を研

究し、卒業後直に京都臨濟宗大本山妙心寺派の學林に教頭として聘せられ、重に倫理や哲學の教鞭を執られたのであります。夫は確に明治三十年頃であつたと思ひます。氏は元來然ういふ質で、常にソクラチースの大聖の人格を大層尊崇され、所謂其知行合一論即ち我が佛教の方で申します行解相應の事です、其を自分の主義として、專ら生徒の教養に盡瘁されました。其後殆んど五箇年にして職を辭し遠くエール大學に遊び、倫理、宗教の研鑽に從事せられ、一方彼地の人情風俗を視察し、歸途歐洲諸國を巡回して、首尾よく歸朝されましたのは明治卅六年秋の頃であつたでせう。處で氏が舍長となられるや、現下の教育が餘りに智の一方にのみ偏して、他の德體二育を等閑に附されてあるを遺憾とし、如何にしても此三育をして同等の發達をなさしめむため、茲に眞美健の三つをたてゝ舍の根本精神とし、此れに基いて總ての制度方針を改善さ

れましたが、就中氏が理想として精力を傾注し熱心に改革されたのは、寄宿舍の制度といふ事であります。で私は同舍敎育の中心は此の寄宿舍の裡に在ると云つても差支へはないと信じます。

四、耐久學舍學校生活の狀況

乃ち先づ其平素は何んな遣り方であるかといふと、極く〳〵の所謂簡易生活で、傭人とか賄方或は小使とかいふものは唯の一人も使はず、百有餘名の舍生自身が交はる〳〵當番で、飯は焚く水は汲む風呂はたてる、內外の掃除は云ふ迄もなく、門番役から小使役から、シャツヅボン下單物等の洗濯物に至る迄、相扶け合つて辨じて行くやうな始末、其他園藝作物及び氣象の實地觀測等も、悉く生徒をして行はしむるといふ風になつて居る。而已ならず勞働會なるものがあつて、學資不足の者には

自分の勞働で、其幾分を補ひ得らるゝ樣な結構な方法も設けてあるのです。如此他に類のない制度で、謂はゞ自治的とか家族的とかいつた仕方ですから、構內は何時も駘蕩として春風に滿ちて居るのです。從つて學科品行の成蹟も、中々に良好であるといふ評判であります。

之を約言せば、制度は丁度軍隊的で、日常の仕事は吾々の叢林の遣り方に能く似て居ります。叢林とは御存じの通り、吾々禪宗僧侶が禪を修する道場の事で、誰れでも一旦其所へ這入つたものは、必ず共に薪水の勞を取らなければならぬのが昔からの掟で、矢張今日でも其通り行ひつゝあるのであります。次に此學舍の特色として頗る感服に堪へないのは、寄宿生各自が夏期休暇等に於て歸鄉した場合には、決して他學校の生徒のやうに、何にもせず唯理窟や議論ばかりで無駄に過すやうなことはせず、庭を掃いたり雜巾掛をしたり種々家庭の仕事を厭はず手傳

うといふ事です。故に單に親兄弟が喜ぶ而已でなく、近邊の人達にも影響して子弟の敎育は耐久學舍に限ると迄もいふ程で、非常に賞めて居ります。生徒も勢ひ增加する譯で、只今では通學生とも合せて三百五十有餘もあるといふことです、大略以上の有樣ですから、現今では實に和歌山縣中事實上の模範學校と目せられ、遂に昨冬其筋の認定を得て名稱も耐久中學校と改めたのであります。尙同中學の敎育方針等に關しては、去る一月十五日發行の『實業の日本』に詳細の事柄が出て居るさうですから、有志の人は便宜上就いて見られたならば、益する所があるでせう。

それから校長寶山氏は前にも云つた通り、敎育の眼目といせられて居る眞美健の三大精神を涵養するには、結局創立者梧陵先生の言行を祖述するに在るのだといふので、氏は自ら實踐躬行の卒先者となり、撓まず

倦かず行つてゐられるが、兎に角、氏が主義の基く處は倫理學の精神にもあるだらうが、自分自らは主に佛敎の禪に原因するのだと云つて居られる。然らば氏は何時何所で其修養をせられたかと、云ふと氏の大學時代に始めて鎌倉に來り、私の禪關を敲かれ大の熱心家でありました。其時私は氏に清拙といふ道號を授けたのです。其後大學を出てから妙心寺派の學林に在職中も、相變らず當時其派の管長であつた小林虎關老師を第一として、其他二三の大德に參じ、大に得る處があつたといふことです。

五、學校敎育と禪的修養

私の願ふ處は何れの學校に於ても、敎育の根本主義が其禪にあると否とに論なく、此耐久中學の樣に學理を談ずるのみでなく、共に實踐躬行

の精神を養成するに勉められんことを望む次第であります。

序に私は禪といふものゝ應用に就て、少しく所感を述べやうと思ひます。御承知の通り近時東京で禪が流行し始めて、種々な禪學會が設立せられ、政治家も教育家も實業家も男女學生も、其他あらゆる方面の人達が隨分と熱心の樣で、自分も頼まれて毎月二三の會へ出席し、提唱を仕たり參禪を聽ゐたりして居りますが、之を一方から見ますれば禪の勃興で喜ばしい樣ですが、又他方から見まするとと矢張一種の流行の如く思はれます。恰かも俗謠なぞと等しく、或る時代には盛んに行はるゝと同樣な感じが起つて來ます。然うすると禪といふものは、何だか手品か賣物の樣に見做されて仕舞ふ。實際或る一部の人士には、然か思はれてゐる樣に考へられるが、實に嘆かはしい次第であります、其證據には何時か新聞紙上で『禪學早わかり』とかいふ書物の廣告を見うけましたが、

實に怪しからん事です而已ならず書肆に就いて聞きましても、近頃は學生間に斷片的のもの、即ち隨筆とか何々錄といふ樣な、極めて手輕なものが歡迎されるといふ事ですが、斯ういふ現象は、吾々及び教育者の共に、大に注意せねばならぬ事と信じます。

右の如き傾向で進んでまゐりますれば、禪學辭書や禪學獨案内の出版を見るのは、近き將來にあるだらうと思はれます。實に奇な消息ではありませんか。元來流行といふことは字義上から申しましても、餘り好ましき文字ではありません。先づ通俗的の解釋では流行とは輕淨な心で、一時的に廣く行はれるを意味するやうですが、私は其流行を謂ふ所の流行として終らしめず、寧ろ利用といふ意味で、即ち積極的に眞の隆盛の方面に向はしめたいのが私の愚見であります。それかと云つて此の流行といふものを、强ちに排斥するといふのではありません。何故とな

れば斯の如き現象は、如何なる事物にも認め得らるゝもので、つまり時代思想の變遷上、免るべからざるものであるからです。故に流行といふものをして善い方面に發達させ導くといふことが、社會の先覺者委しく申せば宗教家教育家政治家等の責任といはねばなりませぬ。目下東京なぞで盛んに行はるゝ禪に對しても、私は亦此理想を抱いてゐるのです。

そこで私は單り哲學や禪理を研究するのみに止まらず、更に進んで身を以て自ら行ふといふ事を望むものですが、稍ともすると世には幽玄高尚な議論のみを戯はして、徒らに世間を蔑視冷評する人士が多くあるやうに見うけますが、斯んな風では折角の學理も教育も禪學も何等の功用を奏しないのです。寧ろ無用の長物と云はざるを得ない。加之元來此社會に在る吾々の間に同情といふものが最も必要である以上は、

理論ばかりに止まらず、極く些細な事柄でも勉めて實行して行くやうにせねばなりませぬ。例之ば約束、節制、或は勞働、貯蓄等を自ら行ひ、之を廣く他に及ぼすと同時に、法律や役人等の及ばざる處を弼けると云ふ、大なるコンパッション所謂佛の大慈悲心を持たなければならぬ。お話しは少し長きに過ぎましたが、畢竟する處は意蹈毘盧頂顎行拜童兒足下といふ意に歸着するのです。之を平易に申せば高く悟つて卑く行ふといふことです。此れが即ち吾が佛祖の本懷で、謂はゞ右中學の如きも精神は實に此十字の意に外ならぬのでありますから、繰返すやうですが子弟教導の任に在る人は、深く此の理に鑑みて實行せられたなれば、將來は健全有爲の國民を拵らえる事が出來ると思ひます。(完)

(和歌山縣模範中學校)

第十九編

臨濟禪師四料簡

師晚參示衆云有時奪人不奪境、有時奪境不奪人、有時人境俱奪、有時人境俱不奪、時有僧問、如何是奪人不奪境、師云煦日發生錦、地錦、嬰孩垂髮白如絲、僧云如何是奪境不奪人、師云王令已行天下徧、將軍塞外絕煙塵、僧云如何是人境兩俱奪、師云并汾絕信獨處一方、僧云如何是人境俱不奪、師云王登寶殿野老謳謌、

一　序言附禪の本領

此の度當大學林に於て夏期講習會が行はれると云ふ事は、豫ねて雜誌上でも拜見して居りました、ところで、私が此度、信州の佛敎講習會へ赴

いて居る途中に於て、コヽヲヽから御人が參つて、是非コヽヲヽへ參つて、少し話をする樣にと云ふ事でありましたが何分私の方では、夏安居中で他出する事は、遁れられない所を强ひて信州に參つたので、今日は歸り途であるから、別に御話しする事は充分出來ないマルデ驟雨の通る樣な者であるで、あちらでも、臨濟錄の或る部分を講釋して居りました、ソコデ今日も亦その語錄の中にある四料簡の御話しを致すのであるが、此の四料簡と云ふのは、料は「パカル」簡は「エラブ」と云ふ字ですが此れを我々が宗門の提唱風に云うてしまへば極アッサリとした事で、別段多辯を費すに及ばぬが、夫れぱかりでは、始めて御聞き取りの御方には如何かと思ひますから、實は少こしへり下りて御話ししやうと思ひます、それで此の四料簡は洞家に於ける五位の如く精剛なる武器があると同じことで、臨濟にも四料簡と云ふ事は隨分鋭利な兵器である、禪と云

ふ者は御互に承知して居る通り、元より宇宙の眞理なるものを言句思想の上に顯はしたので、否、實は其の言句思想などと云ふものは超絶してしまうて、ソコデ始めて眞理に悟入すると云ふのが、これが禪の本領です、で、ある故古人は吾宗に語句なし更に一法の人に與ふるなしと云ふ、此が禪宗の家常の茶飯です、即ち彼れ是れと辯舌を以て說き顯はす所の法ではない、ドウしても眞の境界を得んとすれば、一回白汗を洒いた上に豁然として始て貫通する事の出來るので、何程富樓那の辯を振つて學理を論ずる事が出來ても、禪の本領より見れば遠うして遠し、ソンナラバ禪と他の學問其の學問中の學問とも云ふべき哲學、即ち禪を哲學とは關係があるかと云ふにマンザラ無關係の者でもない、乍併、哲學を以て禪をさばくと云ふのは依樣畫胡盧と同じで到底哲學者が自分の知識の思想を以て、禪宗の本領を窺ふ事は斷じて出來ぬと云ふて

置かなければならぬのみならず、言語を絶し思想を打超へた所に於いて始めて悟入すると云ふ、云はゞ直覺的のものでそれから、這入らなければ禪の眞味は解らない、大抵世間の學問と云へば、先づ哲學で云ふても皆な知識とか經驗とか、さう云ふ學理に當て嵌めて其の考へた知惠を以て、而して眞理を規則的に系統的に研究して行くと云ふのが當然のやり方で、頗るそれは有要な學問ではあるが、禪と云ふものは、其趣向が大いに相違のあるもので、禪より哲學を見ると大變迂遠な者である、併し希くは、哲學を研究し、それから禪にも這入り、兩面に通じて、而して眞理を辯證しやうと、と云ふのが御互の希望です、悲しひ事には、禪を會して居るものは他の學問の方に迂いと云ふ傾きがある夫れから學者は只だ學理々々と云うて夫れに當て嵌めやふと云ふ、ヤバリ一邊に傾く風がある、それ故將來禪道佛法を世に顯はさうと云ふには兩方面共

に、御互に研究しなければならぬ、で、まづ本文に移つて一々御話し致しましやう

二、四料簡の解義

師晩參示衆云……此れは臨濟錄中の一節である故、一段々々に切れて居る其の中の一段を掲げて居るのです有時奪人不奪境、有時奪境不奪人、有時人境俱奪、有時人境俱不奪、

此の中文字より定めて置かなければならぬが、即ち人と境とを四ッに分けてある此れが一番の主眼です、人と境と使うてあるのは佛法の書物の中でもすくない、多くは此を換へ詞で云へば、常に心と境と云ふて居る、心は即ち一心、境は即ち萬境です、心と云ふ字を人の字に換へた、文字は換つて居るが平生云うて居る心と換はりはない、此れは最初に腹

へ入れて置いて貰はねばならぬ、此をかへ〳〵と換へ詞で云へば、名目が多いのですから、心と境と云うてもよいし、自と他と云うてもよい、又主と客と分けてもよい、若しくは原因と結果に分けてもよい、即ち世間の各學科に種々さま〴〵の名詞がある如く、此れもヤハリ所に依りて名を換へてあるが、兎に角、心と境とに定めて置けばよい、ところが、サウどうでしやう、心と境と云ふ字は常に佛法の中には使ふて居る字であるが、成程此の世界は諸法無自性と云ふて、元來諸法は自性なし即ち一切の諸法には自立の性質がないと云ふ事で、此の性質と云うても、こゝは能く聞き分けて貰はなければならぬ、今は充分談する遑はない、例せばマーこゝは倫理學上、善惡と使うても即ち善があるから惡もある惡があるから善もある、けれども、善を取り除いたならば惡獨り立つ事は出來ない、又惡を取り除いたならば善獨り立つ事は出來ない、此れを佛

法の詞で諸法無自性と云ふ、此れが有る故彼れも立つ、彼れがある故、此れも立づて行くと云ふ事になるが、進んで絶對界に這入れば、ソンナ事はない、善惡是非凡べての相對的の詞は皆な無くなるが、暫くこゝでは人と境とに分けて頂出した、トコロデ、人と云ふもの即ちこゝで云ふ人、自己を原因とすれば凡べての萬物は結果と云ふ事になる、原因結果と云ふ事は御互に常に使つて居る詞ですが、原因と云ふ者の大抵の定義は此れあれば彼れあり、此れなければ彼なしといふ、此れが原因のきめ方、それで結果の方は彼あれば此れあり彼なければ此れなしと云ふので、只だ此の主客の二つがある丈です、自然人なら人、心なら心が、原因になると一切の萬物は、此の原因の中に隱されて仕了ふ、若し又、境が原因の主となれば、自己、心と云ふ者は皆な萬境の方に覆はれて仕了ふ、奪はれて仕了ふ、此れを虛心に平らたい觀念で眺めると、原因と結果と同じ

事で、原因なきの結果は本當の結果でない、結果なきの原因は本當の原因ではないです、ダン〳〵と詮じつめて見ると、原因と結果とを立つるのは、假りに終りと始めを立つるとか、或は有形無形を立つるとかと云ふ、只だ賓主處を換へる丈です、カウ云ふ事を哲學者に言はせると一つの辯證法とでも云ふでしよう、即ち此れあれば彼あり此なければ彼なし、彼あれば此あり彼なければ此なしと云ふ工合に、其の凡べての論理法で、一躰の者に及ぼして見ると成程哲學に當て箝めても臨濟の立て方と換つて居らぬ故、哲學者は哲學の一種であると云ふ工合に說く事もある、夫れだけでは、我々は滿足する事は出來ない、夫れは大體臨濟に於てカウ四料簡を立てたのと云ふのは、此れは正しく一つの法を示しただけである、法を使ふ所に於ては絶對的に人と云はうが、自己と云はうが、差支ない、臨濟の宗意はこゝです、元より對待を絶した所の一とつ

の活きたる所の眞理を暫く四料簡に依つて自由自在に使ひ廻はすのである、夫れ故一つの眞理を四通りの方面から見たと云ふてもよい、即ち前より後ろより左より右より見たのである、例せば一つの富士山ではあるが、其の富士山の絶頂に登れば對待を絶して居るが、併し其の眺める方面〳〵に依つて即ち駿州と甲州とは眺める趣きを異にして居る、それで餘計なことじやが假りに、昔しから今迄の西洋の哲學に當て嵌めて見ると、奪人不奪境と云ふのは、唯物論に似た事になる、此の唯物論の事を夫れ〳〵一々盡して居る事は出來ないが、まづソウ云ふ有樣ですそれから奪境不奪人と云ふと唯心論の趣きに似て居る、夫れから、人境俱不奪と云ふと唯理論と云ふてよいでしよう、又絶對論にも當るでしよう、夫れから人境俱不奪と云ふは二元論又は相對論と云ふやうな者で、一方で一元といへば一方では二元論と云ふ樣に凡そ西洋東洋

の哲學者の說が、今に至る迄歸着する所はない、一元論者は、どこ迄も、凡ての宇宙を一元で觀察しようと思ひ、二元論者は二元で凡べての宇宙を觀察しようとする、唯心論者も唯物論者も亦爾り、此れは水火相容れざるものゝ如くに固執して居り、甚だ窮屈千萬である、臨濟の眼より見れば最も窮窟である、此に至ると臨濟は自由なもので、或時は奪人不奪境と云ひ、或時は奪境不奪人と云ふ、即ち唯心論を以て唯物論を否定する事もあり、唯物論を以て唯心論を否定する事もある、又一元論を以て二元論を否定する事もあり、又二元論を以て一元論を否定する事もある、此れを佛法の詞で云ふと即ち掃蕩門又は遮情門と云ふ、其の方から云へば、互ひと互ひに否定すると云ふ場合がある、若し又表德門即ち建立門より云へば此れは互に許るすと云ふ事があつて、即ち唯物論を叩いて見れば、唯心論は離れて居らぬ伴ふて居つて、又唯心論を叩いて見

れば唯物論も伴ふて居つて、切れ〳〵になつて居らぬ、又二元論と一元論とは互ひについて廻はつて居ると云ふ理窟で、即ち互に助け互に成すと云ふ事になる、即ち奪ふ時には一切奪ひ、與へる時には凡べて與へると云ふ遣り方である、

凡そ此の臨濟錄一部は勿論の事、臨濟禪師が一生涯、人の爲にして法を扱ふ事は、此れを自由自在に振り廻はしたので此れと云ふ者に依つて居らない、或る場合は如何是佛と云へば、直に一棒を施し、又如何是佛と云へば、一喝を下すと云ふ樣に、併し此の一喝や一棒を振り廻はす所の形や言語の上で、其の的意を見やうとしたなれば、決して禪の禪たる本領を見る事は出來ない、夫れで此等の事を合點しない所の者は、臨濟は何にもかも奪ふて否定する故、西洋にある懷疑論者の樣であると云ふ者があるかも知らぬが、決して、サウではない、なぜなればと云ふに、肯ふ

時は肯ひ許す時は許す底の一定の法がある、夫れなれば獨斷論者であるかと云ふに、ソウではない一定の者を固執し固定しては居らない、其の邊を見て貰はなければならぬ、サウ云ふ事は文字の上に現はれて居らぬが、兎に角活きたる禪意を會して置いた、此を眺めますに或時は春の景色、百花爛熳と咲き亂れ鳥も吟すると云ひ、或時は夏の景色、或時は秋の景色、天地肅殺として木の葉も飛び散ると云ふ、サウ云ふ天地自然の現象も宗旨の扱ひより見れば、禪意を會得したも同じです、夫れで能く或る者が出て來て云ふ事であるが、此の四料簡を外交上に使つたならばよからうと云ふ者もあるが、併し此の四料簡を、一とつの「サシガネ」や「ブンマワシ」と見てもいけない、此の四料簡は元來一心を以て萬事に向ひ臨機應變自由に取扱ふのであるから、此れを樽俎折衝の上にも、又商法の掛け引上であらうが、又御互ひ人と交際する上に就ても、我々の

一擧手一投足の上に於ても自由に使ふ、必らずしも一喝を吐き一棒を下さなければならぬと云ふ譯ではない、即ち佛と問へば乾屎橛とか、麻三斤とか答へなければならぬと云ふ鑄形的では、此の眞意を會する事は出來ない、餘り弘むると限りがないから、此れより一句々々に就いて申しましよう

有時奪人不奪奪、即ち或る場合は心とか我とかと云ふものを、全然奪ふて仕了ふと、萬境がずらりと現はれて居る、此れが所謂甲あれば乙あり、乙なければ甲なしと云ふ事に當て箝めて見てもよい、又原因結果に見てもよい、即ち萬境が立すると云ふと、人は鵝の毛の先き程も立たぬ、併し此れば かりでは眞理ではない、即ち眞理を甲乙いろ〳〵の方面から見たから有時にはとこと、わつで居る、此れは一寸一とつ咲いて居る所の草花でも、ソウです別に白百合には限らぬが、露を帶びて居る朝顏の

花を見ても萬境を代表して居る、其處に至つては、ソロモンの榮華も、奈良朝の榮華も、此の一とつの朝露に咲いた花にも及ばぬ程である、即ち萬境に現はれて居る、彼の山の巍々と聳へて居る有樣、又河の滔々と流れて居る有樣、凡べて蒼の天に戻り魚の淵に躍る有樣、皆サウです、此れを奪人不奪境と云ふのである、又有る場合はクルリと地位を換へて、乙あれば甲あり乙なければ甲なしと云ふ事を奪境不奪人に當て箝めて見ると一切の境を奪ふて一切の人を奪はぬ事になる、常に禪者が平生云ふ事です、又我々も云ふ。です、此の世界に、土一と嘗めもない、此の本堂には誰れ人も居らぬと云ふと一寸悟り臭ひ樣に耳に觸れるかも知らぬが、悟りでも何んでもない、他の敎理の天台の空假中にも華嚴の四法界にも、此場合はあるのです、今は夫れを辯ずる暇はない、兎に角、境を奪ふて人を奪はぬ事になると、所謂、宇宙無雙日乾坤只一人と云ふ句があ

る其の趣きです、一切萬境を奪つて我一人と云ふ境界、所謂唯我獨尊の境界と云ふのは、こゝぢや、事をなす上でもサウです、或る一とつの仕事を仕上げやうとするには、奪境不奪人の境界で行かねばならぬ、例へば屋島の檀の浦の戰のキツツハツツの上、敵味方折衝の中に在つても大寂定中である又「ナポレオン」の所謂、豈に我を遮ぎるの「アルプス」山あらんやの意氣である併し戰ひばかりではない、自分と云ふものを立てゝ他を奪ふて獨立の境界になるのは、萬事に付けて必要である、

夫れから人境俱奪、此れも同じ事である、甲なければ乙なし、乙なければ甲なしと云ふ有樣で、諸法と云ふものは凡べて相對です、善と云ふ者があつて惡が立ち、人と云ふ者があつて境が立つ、凡て能認する意識がある故、能認せらるゝ者がある、能認せらるゝ者がある故、能認する心識が立つ樣な理窟で、此れは互に倚り掛つて持ちつ持たれつして居る、夫れ

を解き離して見ると、人境俱奪で人も境も立たぬ事になる、所謂諸法無自性ぢや、今度は第四番に現はれて來る、今云ふ所と正反對で、人境俱不奪といふ、即ち甲あれば乙あり、乙あれば甲ありと云ふ、此れが所謂人は境に依つて立ち境は人に依つて立つ鹽梅です、壞らずして成立つて居る、境は人を容れ、人は境を容れて衝突して居らぬ、

此の四料簡は一種の學理を成立たせたのでない、自然現象を云ひ顯はしたもので、我々の心理作用は凡べてこゝにあるのです、コウまづ此れだけで句面は分かつたか知らぬが、實は我々の本領ではない、コンナ蛇足を添へて御話しをした丈である、その積りで御聞取りを願ひたい、

三、四料簡問答に就て

夫れから問答に就て講じます、此れは人が出て來て問ふたのであると

見てもよいが自問自答と思ふてもよい、兎に角問答體に出來て居る、即ち、第一が如何是奪人不奪境、師云照日發生鋪地錦、櫻孩垂髮白如絲、扱て私が前で申した樣な迂遠な辯は臨濟禪師は弄しない、此の文字言句程便利な者はないが、大に又語弊を具へた者で、凡べて學理と云ふ事は悲しひ事には、多く文字言句にヒッヒいて仕了ふて、四料簡と云ふも直ぐ其規則に、カラマレテ仕了ふ、大體吾宗に言句なく更に一法の他に與ふるなしと云ふ、其處から來て居るのですから、饒舌べる時には悉く世界を一枚の舌として饒舌るです、夫れ故凡べて詩的に舒布する有樣如何なる理窟も、とゞかぬ、ところから來て居る、夫れから自然を歌ひ出し、自然の儘を感じて接した所を謠ひ出すので、所謂言句を絶し見聞思慮を離れた處から出て來て居る、夫れ故詩的の考がないと、禪宗語錄は、ザッパリ趣味が解からぬ、詩の境界詩の意味が解からなければならぬ、其

處が禪宗の一つの特色であつて、今同じ佛敎の中でも敎相的になると道筋を立て、論じてある、夫れに反して、コチラは不規則の所、即ち無造作の所に天眞爛熳の妙を示すといふ、夫れ故、詩の語句に就いては、自分と自分で能く練つて考へて見なければならぬ、夫れで此の答の句面をザット申すと照日と云ふのは、暖日と云ふも同じ事で、春先きになると地に鋪く錦で、古歌にもある通り「見わたせば柳櫻をこきまぜて都そ花の錦なりけり」此の境界には己といふ人と云ふものは少こしも立つて居らぬ、夫れで萬境は直に原因と云ふ有樣を述べて、櫻孩垂髮白如絲、人を云ふやうであるが、櫻孩は即ち生れたばかりの赤子、然るに白髮と云ふは赤子に無い筈である、こゝが即ち人を奪ふて居る、コウ云ふ處に言句の妙を顯はして居るのです、昔し老子は白髮で生れたと云ふ、今は夫れには拘はらない、即ち櫻孩垂髮白如絲、直に人を奪ふて境を奪はぬ有

樣が顯はれて居る、夫から次に如何是奪境不奪人師云王令已行天下徧將軍塞外絶煙塵、誠に今日の明治の狀態が現實に顯はれて居る樣です、王令が一たび行はるれば誰れ一人背く者はない、天子の掌中に一切の主權を握つて居る、又夫れと同時に一たび帝王の御信任を得て將軍なる職權を行ふ時には、此の句面の通り塞外には將軍が令を專らにして誰れ一人反抗するものがない、煙塵を絶すと云ふ事は、煙塵は物騷と云ふ程で、昔は戰爭でもあると「ハロシ」を揚げるから此字が出來た、即ち將軍の命令には誰れ一人立て附く者もなく、天子の御領内には誰れ一人王令を奉ぜぬ者はない、云はゝ日本五千萬人、上み御一人で、しろし召して居らるゝと云ふ、全く御一人である、夫れから次に、如何是人境兩俱奪師云并汾絶信獨處一方、此の并汾と申して當時の支那時代では北の方に有つた國で、一向其の時分には政令の行きといかぬ所であつて、此の

并州汾州は全然中國と隔絶して居て音沙汰も絶へて居ると云ふ有樣、誰れ一人も交通をしないと云ふ、シテ見ると人と云ふ者も境と云ふ者も有るが如く見ゆるが、其の用をなして居らない其働きをなして居らぬ故これを俱奪といふ事を云ひ顯はした、夫れから次に、如何是人境俱不奪師云王登寶殿野老謳謌、此れは人も境も各々自由を恣にして居る有樣です、丁度仁德天皇樣の御詠に「高き屋に登りて見れば煙立つ民の竈は賑はひにけりと」仰せられた今此の御歌と此の句と殆んど相應して居ります、誠に、ドウも仁德ある國王が寶殿に登りて眺むれば野老謳謌すと云ふ、野老と申しても農業者ばかりでない、各々一般の人民が其業に勵げみ、其業を樂んで、國王も一般人民も眞理の德を分けて互に奪うて居らぬ、互に相許して居る有樣は、此の短簡なる詞で云ひ顯はした、即ち王寶殿に登れば野老謳謌すと大抵此れで意味が通じたか知らぬ

が、まづ通ずる樣な積りで申したです、此れを敷演すればます〳〵蛇足を付けて御話しするたけです、なほ、コウ云ふ事は只た聞た時ばかりではない、其の四料簡を使ひ廻はす上にあるのであるから、臨濟の四料簡は此通りと云ふ丈でない、偶ま〳〵佛法の大意を尋ぬると云ふと一棒一喝の上に此の四ッを示して居る事がある、臨濟錄を精讀して見ますと其の場所〳〵に依つて此の四料簡を自由に使ひ廻はした事は掌を指すが如く能く分かつて居ります、ドウか暇のある時に見て下さい、先づ此れで、

筌蹄錄終り

筌蹄錄
正價金八拾錢

明治四十二年二月十日印刷
明治四十二年二月十五日發行

著作者　釋宗演　鎌倉山內松ヶ岡

發行者　辻本卯藏　東京市神田區猿樂町貳番地

印刷者　渡邊八太郎　東京市牛込區榎町七番地

印刷所　日清印刷株式會社

發行所　東京神田區猿樂町貳　弘道館

復製不許

著者檢印

農學博士
法學博士 新渡戸稻造先生著

歸雁の蘆

△好評嘖々 第十壹版▽

洋裝頗る美本
函入全壹冊
正價金壹圓
送料一金拾錢

文學博士 芳賀矢一先生主幹 東亞協會編

曉鶯集

△忽ち再版▽

四六判美本
紙數四百八十頁
正價金八十錢
送料金八錢

325
74

325
74

019630-000-8

325-74

筌蹄録

釋宗演／著

M42. 2

ABG-0410